佐渡伝統文化研究所の「佐渡」に関するQ&A 4

前回で終了の予定でしたが、佐渡を訪れた文化人たちが「佐渡」をどう呼んだのか、というご質問がありましたので、いくつかご紹介したいと思います。

Q4 佐渡を訪れた文化人が「佐渡」をどう呼んだのか

A 市立中央図書館のホームページでは、「本のクイックサーチ」ができるようになっています。これで、「佐渡」「佐渡島」「佐渡が島、佐渡ケ島」のタイトルで、本の検索をかけてみました。その結果、「佐渡」は964件、「佐渡島」は19件、「佐渡が島、佐渡ケ島」が17件出てきます。これらのデータを元に調べてみました。

明治に入って佐渡を訪れた歌人でもあり作家でもあった長塚節（ながつかたかし）は、明治41（1907）年に発行された「ホトトギス」という雑誌に、「佐渡が島」という題名で写生文を発表しています。

次に昭和では、日本の民俗学の祖ともいえる柳田国男（やなぎた　くにお）が昭和7（1932）年に「佐渡一巡記」を、昭和初期の有名な作家であった太宰治（だざい　おさむ）は小説「佐渡」を昭和16（1941）年にそれぞれ発表し、二人とも「佐渡」を使用しています。

昭和25（1950）年に佐渡を訪れた評論家の亀井勝一郎（かめい　かついちろう）は、紀行文「佐渡が島」を書き、文章中には「佐渡が島」と「佐渡」の両方が使われています。国文学者でもあり民俗学者でもあった池田 彌三郎（いけだ　やさぶろう）は「佐渡の旅」（昭和41（1966）年）を書き、また文化功労者の水上勉（みずかみつとむ）は「小木」（昭和42（1967）年）の中で「佐渡」と書いており、両者とも「佐渡」と表記しています。

これが平成の時代に入ると、単行本等で刊行されていないためか、検索しても出てこないのが現状です。

では郷土が生んだ文芸評論家であり、毎日出版文化賞受賞者である青野季吉（あおの　すえきち）はどうであったでしょうか。小山書店が刊行を開始した「新風土記叢書」の第3巻目に、『佐渡』（昭和17（1942）年）とタイトルを付けています。

このようにみていきますと、文化人たちが佐渡をどう受けとめ、どう感じたのかによって、表現に違いが出ているように思われます。

島名のよみ方について、皆さまのご意見をお待ちしています。メール、FAX、手紙等でお寄せください。

〒952―8501　佐渡市両津湊1198佐渡市教育委員会　世界遺産・文化振興課内　佐渡伝統文化研究所
☎27―4170　FAX27―4184
メールアドレス
k-dembun@city.sado.niigata.jp

（参考資料　山本容朗『越後・佐渡の旅路』）文化出版局　昭和57、青野季吉『佐渡』小山書店　昭和17、佐渡市立中央図書館 http://lib.city.sado.niigata.jp/（2007年11月15日）、他）

青野季吉著『佐渡』初版本　書影

鶏を飼っている皆さまへ

高病原性鳥インフルエンザが国内に発生したり、近くに渡り鳥が飛来したからといって、むやみに心配する必要はありません。正しい知識を身につけて、大切な鶏を鳥インフルエンザから守りましょう。

大切な鶏を鳥インフルエンザから守りましょう！

病気の原因となるウイルスと接触さえしなければ、鶏が鳥インフルエンザに感染することはありません。野鳥や野生動物を鶏小屋の中へ侵入させたり、汚れた靴で鶏小屋へは入るのはやめましょう。また、鶏に限らず動物に触った後は、手洗いやうがいを習慣づけてください。

もし、飼っている鶏が死んでしまったら？

鶏も生きものですから、いつかは死んでしまいます。その原因も様々なので、死んだからといって鳥インフルエンザを疑う必要はありません。日頃からよく観察するとともに、もし異常（短期間に多数死ぬなど）と思われるようなら、お近くの獣医師か家畜保健衛生所までご相談ください。また、死んだ鶏の処理は素手で行わず、使い捨て手袋などを着用してください。

鶏は最後まで責任を持って飼いましょう！

動物愛護の観点からも、飼っている鶏を捨てたり、処分したりすることのないよう、また、健康管理には十分気をつけて最後まで大切に飼育してください。

◆お問い合わせ　中央家畜保健衛生所　佐渡支所　☎63―2676